

クララの出家

有島武郎



これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出来事の一つである。

○

○

また夢に襲われてクララは暗い中に眼をさました。うち妹のア

グネスは同じ床の中で、姉の胸によりそつてすやすやと静かに眠りつづけていた。千二百十二年の三月十八日、救世主のエルサレム入城を記念するしゆる棕櫚の安息日あんそくびの朝の事。

数多い見知り越しの男たちの中で如何どういう訳か三人だけが

つぎつぎにクララの夢に現れた。その一人はやはりアッシジの貴族で、クララの家からは西北に当る、ヴィヤ・サン・パオロに住むモントルソリ家のパオロだった。夢の中にも、腰に置いた手の、指から肩に至るしなやかさが眼についた。クララの父親は期待をもった微笑を頬ほおに浮べて、品よくひかえ目めにしているこの青年を、もつと大胆に振舞えと、励ますように見えた。パオロは思い入ったようにクララに近づいて来た。そして仏蘭西フランスから輸入されたと思われる精巧な頸飾くびかざりりを、美しい金象眼きんぞうがんのしてある青銅の箱から取出して、クララの頸に巻こうとした。上品で端麗な若い青年の肉体が近寄るに従って、クララは甘い苦痛を胸に感じた。青年が近寄るなと思うとクララはもう上気して軽い瞑眩めまいに襲われた。胸の皮膚は擦くすぶられ、肉はしまり、血は心臓から早く強く押出された。胸から

下の肢体したいは感觸を失つたかと思うほどこわばつて、その存在を思う事にすら、消え入るばかりの羞恥しゆうちを覚えた。毛の根は汗ばんだ。その美しい暗緑の瞳ひとみは、涙よりもつと輝く分泌物の中に浮き漂つた。軽く開いた唇くちびるは熱い息氣いきのためにかさかさ乾いた。油汗の沁しみみ出た両手は氷のように冷えて、青年を押もどそうにも、迎え抱かかこうにも、力を失つて垂れ下つた。肉体はややともすると後ろに引き倒されそうになりながら、心は遮しや二無むに二前むにの方に押し進もうとした。

クララは半分氣を失いながらもこの恐ろしい魔術のような力に抵抗しようとした。破滅が眼の前に迫つた。深淵が脚下に開けた。そう思つて彼女は何とかせねばならぬと悶もだえながらも何んにもしないでいた。慌あわて戦おのく心は潮うしおのように荒れ狂いながら青年の方に押寄せた。クララはやがてかのしなや

かなパオロの手を自分の首に感じた。熱い指先と冷たい金属とが同時に皮膚に触れると、自制は全く失われてしまった。彼女は苦痛に等しい表情を顔に浮べながら、眼を閉じて前に倒れかかった。そこにはパオロの胸があるはずだ。その胸に抱き取られる時にクララは元のクララではなくなるべきはずだ。

もうパオロの胸に触れると思った瞬間は来て過ぎ去ったが、不思議にもその胸には触れないでクララの体は抵抗のない空間に傾き倒れて行つた。はつと驚く暇もなく彼女は何所ともどこ判らない深みへまっしぐら驀地に陥つて行くのだつた。彼女は眼を開こうとした。しかしそれは堅く閉じられて盲目めしいのようだった。真暗な闇の間を、颶風ぐふうのような空気の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて行つた。「地獄に落ちて行くのだ」胆きもを

裂くような心咎めこころとがが突然クララを襲った。それは本統ほんとうはクララが始めから考えていた事なのだ。十六の歳としから神の子基督キリストの婢女しもべとして生き通そうと誓った、その神聖な誓言せいごんを忘れた報いに地獄に落ちるのに何の不思議がある。それは覚悟しなければならぬ。それにしても聖処女によつて世に降誕した神の子基督の御顔を、金輪際こんりんざい拝し得られぬ苦しみは忍びようがなかつた。クララはとんぼがえりを打って落ちながら一心不乱に聖母を念じた。

ふと光つたものが眼の前を過ぎて通つたと思つた。と、その両脇りょうわきは柵たなのようなものに支えられて、膝ひざがしらも堅い足場を得ていた。クララは改悛者かいしゆんしやのように啜泣すすりなきながら、柵らしものの上に組み合せた腕の間に顔を埋めた。

泣いてる中うちにクララの心は忽たちまち軽くなつて、やがては十ば

かりの童女の時のような何事も華やかに珍らしい気分になつて行つた。突然華やいだ放胆な歌声が耳に入った。クララは首をあげて好奇の眼を見張つた。両脇は自分の部屋の窓枠に、両膝は使いなれた櫛かしの長椅子ながいすの上に乗つていた。彼女の髪は童女の習慣どおり、侍童べいじうのように、肩あたりまでの長さに切下きりさげにしてあつた。窓からは、朧夜おぼろよの月の光の下に、この町の堂母どうもなるサン・ルフィン寺院とその前の広場とが、滑かな陽春の空気に柔らめられて、夢のように見渡された。寺院の北側をロッカ・マジョーレの方に登る阪さかを、一つの集団となつてよろけながら、十五、六人の華車きやしゃな青年が、声をかぎりに青春を讚美する歌をうたつて行くのだった。クララはこの光景を窓から見おろすと、夢の中にありながら、これは前に一度目撃した事があるのにと思つていた。

そう思うと、同時に窓の下の出来事はずんずんクララの思
う通りにはかどつて行つた。

夏には夏の我れを待て。

春には春の我れを待て。

夏には隼たかを腕に据えよ。

春には花に口を触れよ。

春なり今は。春なり我れは。

春なり我れは。春なり今は。

我がめぐわしき少女おとめ。

春なる、ああ、この我れぞ春なる。

寝しずまつた町並まちなみを、張りのある男声の合唱が鳴りひびく

と、無頓着むとんじやくな無恥な高笑いがそれに続いた。あの青年たちはもう立止る頃だとクララが思うと、その通りに彼らは突然阪の途中で足をとめた。互に何か探し合っているようだったが、やがて彼らは広場の方に、「フランシス」「ベルナルドーネの若い騎士」パンサー・ロトンダ「円卓子の盟主」などと声々に叫び立てながら、はぐれた伴侶なかまを探しにもどつて来た。彼らは広場の手前まで来た。そして彼らの方に二十二、三に見える一人の青年が夢遊病者のように足もともしどろ、に歩いて来るのを見つけた。クララも月影でその青年を見た。それはコルソの往還を一つへだてたすぐ向うに住むベルナルドーネ家のフランシスだった。華美を極めた晴着の上に定紋じようもんをうった蝦茶えびぢやのマントを着て、飲み仲間の主権者たる事を現わす笏しやくを右手に握った様子は、ほかの青年たちにまさった無頼ぶらいの風俗だったが、その顔は痩やせ

衰えて物凄^{あな}いほど青く、眼は足もとから二、三間さきの石畳を孔^{あな}のあくほど見入^{またた}つたまま瞬^{またた}きもしなかつた。そしてよろけるような足どりで、見えないものに引ずられながら、堂母^{ドーマ}の広場の方に近づいて来た。それを見つけると、引返して来た青年たちは一度にと^かきををつくつて駈^かけよりざまにフランシスを取かこんだ。「フランシス」「若い騎士」などとその肩^{おそ}ま^うで揺^ゆつて呼びかけても、フランシスは恐^{おそ}しげな夢からさめる様子はなかつた。青年たちはそので^いたら^らくにまたどつと高笑^{たか}いをした。「新妻^{にいづま}の事でも想像^{さう}して魂^{たま}がもぬけたな」一人^{ひとり}がフランシスの耳に口をよせて叫^こんだ。フランシスはついた狐^{きつね}が落ちたようにきよとんとして、石畳から眼をはなして、自分を囲むいくつかの酒にほてつた若い笑顔を苦々^くしげに見廻^{みまわ}わした。クララは即興^{もよ}詩でも聞^きくように興味^{きょうみ}を催^{もよ}おして、窓

から上体を乗出しながらそれに眺め入った。フランシスはやがて自分の纏まとったマントや手に持つ笏しやくに気がつくくと、甫はじめて今まで耽ふけつていた歡樂の想出おもいでの糸口が見つかったように苦笑いをした。

「よく飲んで騒いでもんだ。そうだ、私は新妻の事を考えている。しかし私が貫もらおうとする妻は君らには想像も出来ないほど美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」

そういつて彼れは笏を上げて青年たちに一足先きに行けと眼で合図した。青年たちが騒ぎ合いながら堂母ドーマの蔭に隠れるのを見届けると、フランシスはいまいましてに笏を地に投げつけ、マントと晴着とをずたずたに破りすてた。

次の瞬間にクララは錠ドーマのおりた堂母の入口に身を投げかけて、犬のようにまろびながら、悔恨の涙にむせび泣く若いフ

ランシスを見た。彼女は奇異の思いをしながらそれを眺めていた。春の月は朧おぼろに霞かすんでこの光景を初めからしまいまで照している。

寺院の戸が開いた。寺院の内部は闇で、その闇は戸の外に溢れ出るかと思うほど濃かった。その闇の中から一人の男が現われた。十歳の童女から、いつの間にか、十八歳の今のクララになって、年に相当した長い髪を編下げにして寝衣ねまきを着たクララは、恐怖の予覚を持ちながらその男を見つめていた。男は入口にうづくまるフランシスに眼をつけると、きつとクララの方に鋭い眸ひとみを向けたが、フランシスの襟元えりもとを掴つかんで引きおこした。ぞろぞろと華やかな着物だけが宙につるし上つて、肝腎かんじんのフランシスは溶けたのか消えたのか、影も形もなくなっていた。クララは恐ろしい衝動を感じてそれを見ていた。

と、やがてその男の手に残った着物が二つに分れて一つはクララの父となり、一つは母となった。そして二人の間に立つその男は、クララの許婚いいなすけのオッタヴィアナ・フォルテブラッチョだった。三人はクララの立っている美しい芝生より一段低い沼地がかつた黒土くろつちの上に単調にずらつとならんで立っていた——父は脅おびやかすように、母は歎くように、男は怨うらむように。たたかいちまた戦の街を幾度もくぐつたらしい、日に焼けて男性的なオッタヴィアナの顔は、飽く事なき功名心と、強い意志と、生一本きいっほんな氣象とで、固い輪郭りんかくを描いていた。そしてその上を貴族的な誇りが包んでいた。今まで誰れの前にも弱味を見せなかつたらしいその顔が、恨みを含んでじつとクララを見入っていた。クララは許婚の仲であるくせに、そしてこの青年の男らしい強さを尊敬しているくせに、その愛をおとなしく受けよ

うとはしなかつたのだ。クララは夢の中にありながら生れ落ちるとから神にささ獻げられていたような不思議な自分の運命を思いやつた。晩おそかれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考えた。見ると三人は自分の方に手を延ばしている。そしてその足は黒土の中にじりじりと沈みこんで行く。脅かすような父の顔も、歎くような母の顔も、怨むようなオツタヴィアナの顔も見ると、眼せまに逼る難儀を救ってくれと、恥も忘れて叫ばんばかりにゆがめた口を開いている。しかし三人とも声は立てずに死のように静かで陰鬱いんうつだった。クララは芝生の上からそれをただ眺めてはいられなかつた。口まで泥の中に埋まつて、涙を一ぱほかいたためた眼でじつとクララに物をいおうとする三人の顔の外ほかに、果てしのないその泥の沼には多くの男女の頭が静かに沈んで行きつつあるのだ。頭が沈

みこむとぬるりと四方からその跡を埋めに流れ寄る泥の動揺は身の毛をよだてた。クララは何もかも忘れて三人を救うために泥の中に片足を入れようとした。

その瞬間に彼女は真黄まっさいに照り輝く光の中に投げ出された。芝生も泥の海ももうそこにはなかった。クララは眼がくらみながらも起き上がろうともがいた。クララの胸を掴んで起させないものがあつた。クララはそれが天使ガブリエルである事を知つた。「天国に嫁ぐとつためにお前は浄めきよられるのだ」そういう声が聞こえたと思つた。同時にガブリエルは爛々らんらんと燃える炎の剣をクララの乳房の間からずぶりとさし通した。燃えさかつた尖頭きつさきは下腹部まで届いた。クララは苦悶うちの中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して十字架にかかつたキリスト基督の姿が厳かに見やられた。クララは有頂天になつた。

全身はかつて覚えのない苦しい快い感覚に木の葉の如くおののいた。喉も裂け破れる一声に、全身にはり満ちた力を搾り切ろうとするような瞬間が来た。その瞬間にクララの夢はさめた。

クララはアグネスの眼をさまさないようにそつと起き上つて窓から外を見た。眼の下には夢で見たとおりのルフイノ寺院が暁闇の中に厳かな姿を見せていた。クララは扉をあけて柔かい春の空気を快く吸い入れた。やがてポルタ・カプチイニの方にかすかな東明の光が漏れたと思うと、救世主のエルサレム入城を記念する寺の鐘が一時に鳴り出した。快活な同じ鐘の音は、麓の町からも聞こえて来た、牡鶏が村から村に時鳴を啼き交すように。

今日こそは出家して基督に嫁ぐべき日だ。その朝の浅い眠

りを覚ました不思議な夢も、思い入った心には神の御告げに
違いなかった。クララは涙ぐましい、しめやかな心になって
アグネスを見た。十四の少女は神のように眠りつづけていた。
部屋は静かだった。



クララは父母や妹たちより少しおくれて、朝の礼拝れいはいに聖ル
フィノ寺院に出かけて行つた。在家ざいけの生活の最後の日だと思
うと、さすがに名残が惜しまれて、彼女は心を凝らして化粧
をした。「クララの光りの髪」とアツシジで歌われたその髪
を、真珠紐しんじゆひもで編んで後ろに垂れ、ベネチヤの純白な絹を着た。
家の者のいない隙すきに、手早く置手紙と形見の品物を取りまと

めて机の引出しにしまった。クララの眼にはあとからあとから涙が湧き流れた。眼に触れるものは何から何までなつかしまれた。

一人の婢女はしためを連れてクララは家を出た。コルソの通りには織るように人が群れていた。春の日は麗うららかに輝いて、祭日の人心を更らに浮き立たした。男も女も僧侶もクララを振りかえって見た。「光りの髪かみのクララが行く」そういう声があちらこちらで私語ささやかれた。クララは心の中で主の祈を念仏のように繰返し繰返しひたすらに眼の前を見つめながら歩いて行つた。この雑鬧ざつとうな往来わらいの中でも障碍しょうがいになるものは一つもなかった。広い秋の野を行くように彼女は歩いた。

クララは寺の入口を這はい入るとまっすぐにシツファイ家の座席に行つてアグネスの側に坐を占めた。彼女はフォルテブラツ

千ヨ家の座席からオツタヴィアナが送る視線をすぐに左の頬
 に感じたけれども、もうそんな事に頓着とんじやくはしていなかった。
 彼女は座席につくと面おもてを伏せて眼を閉じた。ややともすると
 所わきまも弁えずに熱い涙が眼がしらににじもうとした。それは悲
 しさの涙でもあり喜びの涙でもあつたが、同時にどちらでも
 なかった。彼女は今まで知らなかつた涙が眼を熱くし出すと、
 妙に胸がわくわくして来て、急に深淵のような深い静かさが
 心を襲つた。クララは明かな意識の中すべにありながら、凡ての
 ものが夢のように見る見る彼女から離れて行くのを感じた。
 無一物しやうじやうな清浄な世界にクララの魂だけが唯ただ一つ感激に震えて
 燃えていた。死を宣告される前のような、奇怪な不安と沈静
 とが交かわる交かわる襲つて来た。不安が沈静に代る度にクララの眼
 には涙が湧き上つた。クララの処女らしい体は蘆あしの葉のよう

に細かくおののいていた。光りのようなその髪もまた細かに震えた。クララの手は自らアグネスの手をおのずか見めた。

「クララ、あなたの手の冷たく震える事」

「しつ、静かに」

クララは頼りないものを頼りにしたのを恥じて手を放した。そして咽むせるほどな参詣人さんけいじんのいきれの中でまた孤独に還つた。

「ホザナ……ホザナ……」

内陣から合唱が聞こえ始めた。会衆の動揺は一時に鎮しずまつて

座席を持たない平民たちは敷石の上に跪ひざまずいた。開け放した窓

からは、柔かい春の光と空気とが流れこんで、壁に垂れ下つ

た旗ながばたや旒ながばたを静かになぶつた。クララはふと眼をあげて祭壇を

見た。花に埋められ香をたきこめられてビザンチン型けいの古い

クロチエ・フィツソ
 十字架聖像が奥深くすえられてあつた。それを見るとクララは咽せ入りながら「アーメン」と心に称えて十字を切つた。何んという貧しさ。そして何んという慈愛。

祭壇を見るとクララはいつでも十六歳の時の出来事を思い出さずにはいなかった。殊にこの朝はその回想が厳しく心に逼つた。

今朝の夢で見た通り、十歳の時眼のあたり目撃した、ベルナルドーネのフランシスの面影はその後クララの心を離れなくなつた。フランシスが狂気になつたという噂さも、父から勘当を受けて乞食の群に加わつたという風聞も、クララの乙女心を不思議に強く打つて響いた。フランシスの事になるとシツファイ家の人々は父から下女の末に至るまで、いい笑い草にした。クララはそういう雑言を耳にする度に、自分でそん

な事を口走つたように顔を赤らめた。

クララが十六歳の夏であつた、フランシスが十二人の伴侶なかまと羅馬ローマに行つて、イノセント三世から、基督キリストを模範にして生活する事と、寺院で説教する事との印可いんかを受けて歸つたのは。この事があつてからアツシジの人々のフランシスに対する態度は急に変つた。ある秋の末にクララが思い切つてその説教を聞きたいと父に歎願した時にも、父は物好きな奴だといつたばかりで別にとめはしなかつた。

クララの回想とはその時の事である。クララはやはりこの堂母ドームのこの座席に坐つていた。着物を重ねても寒い秋寒に講壇まつぱだかには真裸なレオというフランシスの伴侶なかまが立つていた。男も女もこの奇異な裸形らけいに奇異な場所に出遇つて笑いくずれぬものはなかつた。卑しい身分の女などはあからさまに卑猥ひわいな

言葉をその若い道士に投げつけた。道士は凡ての反感に打克うちかくつだけの熱意を以て語ろうとしたが、それには未だ少し信仰が足りないように見えた。クララは顔を上げ得なかつた。

そこにフランシスがこれも裸形のまままで這入はいつて来てレオに代つて講壇に登つた。クララはなお顔を得上げえなかつた。

「神、その独子ひとりご、聖霊及び基督の御弟子みでしの頭かしらなる法皇の御許によつて、末世の罪人、神の召によつて人を喜ばす軽業師かるわざしなるフランシスが善良なアツシジの市民に告げる。フランシスは今日教友のレオに堂母ドームで説教するようにといつた。レオは神を語るだけの弁才さすかを神から授つていないと拒こぼんだ。フランシスはそれなら裸になつて行つて、体で説教しろといつた。レオは雄々おおしくも裸になつて出て行つた。さてレオが去つた後、レオにかかる苦行くぎようを強いながら、何事もなげに居残つ

たこのフランシスを神は厳しく鞭むちうち給うた。眼ある者は見よ。懺悔ざんげしたフランシスは諸君の前に立つ。諸君はフランシスの裸形を憐あはまるるか。しからは諸君が眼を注いで見ねばならぬものが彼所かしこにある。眼あるものは更に眼をあげて見よ」

クララはいつの間にか男の裸体と相對している事も忘れて、フランシスを見やっていた。フランシスは「眼をあげて見よ」というと同時に祭壇に安置された十字架クルシ・フィツキス聖像を恭うやうやしく指した。十字架上の基督は痛ましくも瘦やせこけた裸形のまままで会衆を見下ろしていた。二十八のフランシスは何所どこと云って際立つて人眼を引くような容貌を持つていなかったが、祈祷きとと、断食だんじきと、労働のためにやつれた姿は、靈化した彼れの心をそのまま写し出していた。長い説教ではなかったが神の愛、貧窮ひんききゆうの祝福などを語って彼がアーメンと云って口をつぐんだ時には、

人々の愛心がどん底からゆすりあげられて思わず互に固い握手をしてすすり泣いていた。クララは人々の泣くようには泣かなかつた。彼女は自分の眼が燃えるように思った。

その日彼女はフランシスに懺悔ざんげの席つらなに列つらなる事を申しこんだ。懺悔するものはクララの外ほかにも沢山いたが、クララはわざと最後を選んだ。クララの番が来て祭壇の後ろのアプスに行くと、フランシスはただ一人獣色けものいろといわれる樺色かばいろの百姓服を着て、繩の帯を結んで、胸の前に組んだ手を見入るように首を下げて、壁添いの腰かけにかけていた。クララを見ると手まねで自分の前にある椅子いすに坐れと指した。二人は向いあつて坐つた。そして眼を見合わせた。

曇つた秋の午後のアプスは寒く淋しく暗わたみ亘わたつていた。ステインド・グラスから漏れる光線は、いくつかの細長い窓を

暗く彩いろどつて、それがクララの髪の毛に来てしめやかに戯たむれた。恐ろしいほどにあたりは物静かだった。クララの燃える眼は命の綱のようにフランシスの眼にすがりついた。フランシスの眼は落着いた愛に満ち満ちてクララの眼をかき抱くようにした。クララの心は酔いしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拝もうとした。やがてクララの眼に涙が溢れるほどたまつたと思うと、ほろほろと頬を伝って流れはじめた。彼女はそれでも真向まっこうにフランシスを見守る事をやめなかつた。こうしてまたいくらかの時が過ぎた。クララはただ黙つたままで坐つていた。

「神の処女むすめ」

フランシスはやがて厳かにこういった。クララは眼を外にうつすことが出来なかつた。

「あなたの懺悔は神に達した。神は嘉し給うた。アーメン」
クララはこの上控えてはいられなかった。椅子からすべり下りると敷石の上に身を投げ出して、思い存分泣いた。その小さい心臓は無上の歓喜のために破れようとした。思わず身をすり寄せて、素足のままのフランシスの爪先きに手を触れると、フランシスは静かに足を引きすぎらせながら、いたわるように祝福するように、彼女の頭に軽く手を置いて間遠まじおにつぶやき始めた。小雨の雨垂れこさめのようにその言葉は、清く、小さく鋭く、クララの心をうった。

「何よりもいい事は心の清く貧しい事だ」

独語のようなささやきがこう聞こえた。そして暫しばらく沈黙が続いた。

「人々は今のままで満足だと思っている。私にはそうは思え

ない。あなたもそうは思わない。神はそれをよしと見給うだろう。兄弟の日、姉妹の月は輝くのに、人は輝く喜びを忘れてる。雲雀ひばりは歌うのに人は歌わない。木は跳るおどのに人は跳らない。淋しい世の中だ」

また沈黙。

「沈黙は貧しさほどに美しく尊い。あなたの沈黙を私は美酒うまざけのように飲んだ」

それから恐ろしいほどの長い沈黙が続いた。突然フランシスは慄ふるえる声を押鎮めながらつぶやいた。

「あなたは私を恋している」

クララはぎょつととして更あらためて聖者を見た。フランシスは激しい心の動揺から咄嗟とっさの間に立ちなおっていた。

「そんなに驚かないでもいい」

そういつて静かに眼を閉じた。

クララは自分で知らなかった自分の秘密をその時フランシスによつて甫はじめて知つた。長い間の不思議な心の迷いをクララは種々いろいろに解きわづらつていたが、それがその時始めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何んと感謝していいのか、どう詫わびねばならぬかを知らなかつた。狂気のような自分の泣き声ばかりがクララの耳にやや暫らくいたましく聞こえた。

「わが神、わが凡すべて」

また長い沈黙がつづいた。フランシスはクララの頭に手を置きそえたまま黙もく禱とうしていた。

「私の心もおののく。……私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄道した。……さりながら愛によつてつま

ずいた優しい心を神は許し給うだろう。私の罪をもまた許し給うだろう」

かくいつてフランシスはすつと立上つた。そして今までとは打つて變つて神々こうじゅうしい威嚴でクララを圧しながら言葉を續けた。

「神の御名みなによりて命ずる。永久とこしえに神の清き愛児まなごたるべき処女おとめよ。腰に帯して立て」

その言葉は今でもクララの耳に焼きついて消えなかつた。そしてその時からもう世の常の処女ではなくなつていた。彼女はその時の回想に心を上うわずらせながら、その時泣いたように激しく泣いていた。

ふと「クララ」と耳近くみみ囁くアグネスの声に驚かされてクララは顔を上げた。空想の中に描かれていたアプスの淋しき

とは打つて変つて、堂内にはひしひしと群集がひしめいていた。祭壇の前に集つた百人に余る少女は、棕櫚しゆろの葉の代りに、月桂樹の枝と花束とを高くかざしていた——夕栄ゆうばえの雲が棚引たなびいたように。クララの前にはアグネスを従えて白い髻ひげを長く胸に垂れた盛装そうじようの僧正が立っている。クララが顔を上げると彼れは慈悲深げにほほえんだ。

「嫁ととぎ行く処女おとめよ。お前の喜びの涙に祝福あれ。この月桂樹は僧正によつて祭壇から特にお前に齎もたらされたものだ。僧正の好意と共に受けおさめるがいい」

クララが知らない中うちに祭事は進んで、最後の儀式即ち参詣の処女に僧正手ずから月桂樹を渡して、救世主の入城を頌歌しょうかする場合になつていたのだ。そしてクララだけが祭壇に来なかつたので僧正自らクララの所に花を持って来たのだつた。

クララが今夜出家するという手筈てはずをフランシスから知らされていた僧正は、クララによそながら告別を与えるためにこの破格な処置をしたのだと気が付くと、クララはまた更らに涙のわき返るのをとどめ得なかった。クララの父母は僧正の言葉をフォルテブラッチョ家との縁談と取つたのだろう、笑えみかまけながら挨拶の辞儀をした。

やがて百人の処女の喉のどから華々しい頌歌が起つた。シオンの山の凱歌がいかを千年の後に反響ひびさすような熱と喜びのこもつた女声高音が内陣から堂内を震動さして響ひびき亘わたつた。会衆は蠱惑こわくされて聞きき惚ほれていた。底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらわれにも嵐のように感動した。花の間に顔を伏せて彼女は少女の歌声に揺られながら、無我の祈祷に浸り切つた。



「クララ……クララ」

クララは眼をさましていたけれども返事をしなかつた。幸に母のいる方には後ろ向けに、アグネスに寄り添って臥ねていたから、そのまま息いき気を殺して黙っていた。母は二人ともよく寝たもんだというような事を、母らしい愛情に満ちた言葉でいつて、何か衣裳らしいものを大椅子の上にそっくり置くと、忍び足に寝台に近よつてしげしげと二人の寝姿を見守つた。そして夜着をかけ添えて軽く二つ三つその上をたたいてから静かに部屋を出て行つた。

クララの枕はしぼるように涙に濡れていた。

無月むげつの春の夜は次第ついでに更ふけた。町の諸門をとじる合図の鐘は二時間も前に鳴つたので、コルソに集つて売買に忙がしかつた村の人々の声こゝろ高たかな騒さわぎも聞きここえず、軒なみの店ももう仕舞しまつて寝ねしずまつたらしい。女猫めねこを慕ねこう男猫の思おもい入いつたような啼なき声こゑが時折ときときり聞きここえる外ほかには、クララの部屋へやの時計とけいの重子おもりが静しずかに下くだりて齒車はしごをきしらせる音ねばかりがした。山の上の春の空気くわいはなごやかに静しずかに部屋へやに満みちて、堂母ドローモから二人が持つて帰かへつた月桂樹げいじゆと花束はなむくの香かほを隅々すみずみまで籠こめていた。

クララは取りすがるように祈いのりに祈いのつた。眼まなこをあけると間ま近ちかかにアグネスの眠ねつた顔かほがあつた。クララを姉あねとも親おやとも慕ねがう無邪むじゃ気げな、素直すじな、天使てんしのよううに浄きよらかなアグネス。クララがこの二、三日さんじつややともすると眼まなこに涙なみだをためているのを見て、自分おれも一緒に涙なみだぐんでいたアグネス。……そのアグネ

スの睫毛まつげはいつでも涙で洗ったように美しかった。殊に色白なその頬は寝入ってから健康そうに上気して、その間に形よく盛り上った小鼻は穏やかな呼吸と共に微細に震えていた。「クララの光の髪、アグネスの光の眼」といわれた、無類な潤みを持った童女にしてはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出来なかつた。クララは、見つめるほど、骨肉のいとしさがこみ上げて来て、そつと掌てのひらで髪から頬を撫なでさすつた。その手に感ずる暖いなめらかな触感はクララの愛欲を火のようにした。クララは抱きしめて思い存分いとしがってやりたくなつて半身を起して乗しかかつた。同時にその場合の大事がクララを思いとどまらした。クララは肱ひじをついて半分身を起したままで、アグネスを見やりながらほろほろと泣いた。死んだ一人ひとりご人児を母が撫でさすりながら泣くように。

弾条ぜんまいのきしむ音と共に時計が鳴り出した。クララは数を数えないでも丁度夜半よなかである事を知っていた。そして涙を拭いてもあえず、静かに床からすべり出た。打合せておいた時刻が来たのだ。安息日が過ぎて神聖月曜日が来たのだ。クララは床から下り立つと昨日堂母ドローモに着て行つたベネチヤの白絹を着ようとした。それは花嫁にふさわしい色だった。しかし見ると大椅子の上に昨夜母の持つて来てくれた外の衣裳ほかが置いてあつた。それはクララが好んで来た藤紫ひとそらいの一揃ひとそらいだった。神聖月曜日にも聖ルフィンサンノ寺院で式があるから、昨日のものとは違つた服装をさせようという母の心尽しがすぐ知れた。クララは嬉しく有難く思いながらそれを着た。そして着ながらも、これが両親の許しを得た結婚であつたならばと思つた。父は恐らくあすこの椅子にかけて微笑しながら自分を見守るだ

ろう。母と女中とは前に立ち後ろに立ちして化粧を手伝う事
だろう。そう思いながらクララは音を立てないように用心し
て、かけにくい背中こだんすのボタンをかけた。そしていつもの
習慣通りに小箆こだんすの引出しから頸飾くびかざりと指輪との入れてある小
箱を取出したが、それはこの際になつて何んの用もないものだ
と気が付いた。クララはふとその宝玉に未練を覚えた。その
一つ一つにはそれぞれの思出がつきまつわっていた。クララ
は小箱の蓋ふたに軽い接吻を与えて元の通りにしまいこんだ。淋
しい花嫁の身じたくは静かな夜の中に淋しく終つた。その中
に心は段々落着いて力を得て行つた。こんなに泣かれてはい
よいよ家を逃れ出る時にはどうしたらいいだろうと思つた床
の中の心配は無用になつた。沈んではいるがし、やんと張切つ
た心持ちになつて、クララは部屋の隅の聖像の前にひざまず跪いてあかり燭火

を捧げた。そして静かに身の来し方^こを返り見た。

幼い時からクララにはいい現わし得ない不満足が心の底にあつた。いらいらした気分はよく髪^{かみ}の結い方、衣服の着せ方に小言をいわせた。さんざん小言をいつてから独りになると何んともいえない淋しさに襲われて、部屋の隅でただ一人半日も泣いていた記憶も甦^{よみがえ}つた。クララはそんな時には大好きな母の顔さえ見る事を嫌つた。ましてや父の顔は野獣のように見えた。いまに誰れか来て私を助けてくれる。堂母^{ドーマ}の壁画にあるような天国に連れて行つてくれるからいいとそう思つた。色々な宗教画がある度に自分の行きたい所は何所^{どこ}だろうと思ひながら注意した。その中^{うち}にクララの心の中には二つの世界が考えられるようになりだした。一つはアツシジの市民が、僧侶をさえこめて、上から下まで生活している世界だ。

一つは市民らが信仰しているにせよ、いぬにせよ、敬意を捧げているキリスト基督及び諸聖徒の世界だ。クララは第一の世界に生えい立つて栄耀えい榮華ようえいを極むべき身分にあつた。その世界に何故かつごう渴仰の眼を向け出したか、クララ自身も分らなかつたが、當時ペルジヤの町に対して勝利を得て独立と繁盛との誇りに賑やか立つたアツシジの辻つじを、豪奢ごうしゃの市民に立ち交りながら、「平和を求めよ而しかして永遠の平和あれ」と叫んで歩く名もない乞食の姿を彼女は何んとなく考え深く眺めないではいられなかつた。やがて死んだのか宗旨代がえをしたのか、その乞食は影を見せなくなつて、市民は誰れ憚はばからず思うさまの生活に耽ふけつていたが、クララはどうしても父や父の友達などの送る生活に従つて活いきようと思ふ心地こころちはなかつた。その頃にフランス——この間まで第一の生活の先頭に立つて雄々しくも

第二の世界に盾たてをついたフランシス——が百姓の服を着て、子供らに狂人と罵ののられながらも、聖ダミヤノ寺院さいこんかんじんの再建勸進にアツシジの街に現われ出した。クララは人知れずこの乞食僧の挙動を注意していた。その頃にモントルソリ家との婚談も持上つて、クララは度々自分の窓の下で夜おそく歌われる夜曲を聞くようになった。それはクララの心を躍おどらしときめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた。その時分クララは著者の知れないある古い書物の中に下のような文句を見出した。

「肉おほに溺おほれんとするものよ。肉は靈への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそれを嘔はぐくむものは靈に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉よに倚よら

ずして直ただちに愛の隠るる所を知るなり。聖処女の肉によらずして救主を孕すくいぬしみ給はらいし如ごとく、汝なんじら心の眼まなこさときものは聖靈せいれいによりて諸善の胎はらたるべし。肉の世の広きに恐るる事勿なれ。一度恐れざれば汝らは神の恩恵によりて心の眼まなこさとく生れたるものなることを覚さとるべし」

クララは幾度もそこを読み返した。彼女の迷いはこの珍らしくもない句によつて不思議に晴れて行つた。そしてフランシスに対して好意を持ち出した。フランシスを弁護する人がありでもすると、嫉妬しつとを感じないではいられないほど好意を持ち出した。その時からクララは凡ての縁談を顧かへりみなくなつた。フォルテブラッチョ家との婚約を父が承諾した時でも、クララは一応辞退しただけで、跡は成行きにまかせていた。彼女の心はそんな事には止とどまらなかつた。唯ただ心を籠こめて

きよ
淨い心身をキリスト基督に献おじる機おりばかりを窺うかがつていたのだ。その中うちに十六歳の秋が来て、フランシスの前に懺悔をしてから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出る事が出来た。それから一年半の長い長い天との婚約の試練も今夜で果てたのだ。これからは一人の主にも心も献げ得る嬉しい境涯が自分を待っているのだ。

クララの顔はほてって輝いた。聖像の前に最後の祈を捧げると、いそいそとして立上った。そして鏡を手にとって近々と自分の顔を写して見た。それが自分の肉との最後の別れだった。彼女の眼にはアグネスの寝顔が吸付くように可憐に映った。クララは静かに寢床に近よって、自分の臥ねていた跡ドームに堂母ドームから持帰った月桂樹の枝を敷いて、その上に聖像を置き、そのまわりを花で飾った。そしてもう一度聖像に祈祷を捧げた。

「御心ならば、主よ、アグネスをも召し給え」

クララは軽くアグネスの額に接吻した。もう思い残す事はなかつた。

ためらう事なくクララは部屋を出て、父母の寢室の前の板床いたゆかに熱い接吻を残すと、戸を開けてバルコンに出た。手欄てすりから下をすかして見ると、暗やみの中に二人の人影が見えた。「アーメン」という重い声が出から響いた。クララも「アーメン」といつて応じながら用意した綱で道路に降り立つた。

空も路みちも暗かつた。三人はポルタ・ヌオバの門番まいないに賂わらして

易々やすやす

と門を出た。門を出るとウムブリヤの平野は真暗に遠く

広く眼の前に展ひらけ亘わたつた。モンテ・ファルコの山は平野から

暗い空に崛起くつきしておごそかにこつちを見つめていた。淋しい

花嫁は頭巾ずきんで深々と顔を隠した二人の男に守られながら、す

がりつくようにエホバに祈祷を捧げつつ、星の光を便りに山坂を曲りくねって降りて行つた。

フランシスとその伴侶なかまとの礼拝所なるポルチウンクウラのしょうがんともしび小龕の灯が遙か下の方に見え始める坂の突角に炬火たいまつを持った四人の教友がクララを待ち受けていた。今まで氷のように冷たく落着いていたクララの心は、瀕死者ひんししやがこの世に最後の執着を感じずるようになきびしく烈はげしく父母や妹を思つた。炬火の光に照らされてクララの眼は未練にももう一度涙でかがやいた。いい知れぬ淋しさがその若い心を襲つた。

「私のために祈つて下さい」

クララは炬火を持った四人にすすり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて黙つたままうずくまつた。

平原の平和な夜の沈黙を破つて、遙か下のポルチウンクウ

ラからは、新嫁にいよめを迎うべき教友らが、心をこめて歌いつれる
合唱の聲が、静かにかすかにおごそかに聞こえて来た。

(二九一七、八、一五、於碓氷峠うすいとうげ)

クララの出家

底本：「カインの末裔 クララの出家」岩波文庫、岩波書店
1940（昭和 15）年 9 月 10 日第 1 刷発行
1980（昭和 55）年 5 月 16 日第 25 刷改版発行
1990（平成 2）年 4 月 15 日第 35 刷発行

底本の親本：「有島武郎著作集」第三輯、新潮社
1918（大正 7）年 2 月刊

初出：「太陽」
1917（大正 6）年 9 月

入力：鈴木厚司

校正：染川隆俊

2001 年 2 月 14 日公開

2005 年 9 月 24 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制
作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。